

2026_0501「北極圏の雪解け」日々の理科 4282号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

4月までは夜ごと空を舞い、緑や紫の光で北極圏の空を満たしていたオーロラ。その壮麗な光景を見上げ続けたスウェーデン北部ポルユス駅前にも、季節は静かに、しかし確実に移り変わっていきます。長い冬のあいだ厚い雪と氷に閉ざされていた大地は、春の深まりとともに少しずつ雪解けが進み、駅前に広がる大きな湖にもついに解氷の季節が訪れました。白く閉ざされていた湖面には水の気配が戻りはじめ、冬と春の境界が目に見えるかたちで広がっていきます。

夜10時を過ぎてもなお、西北西の空には夕焼けの名残が大きく残り、空全体が赤紫から群青へとゆるやかに溶け合っています。日本の感覚ではすでに深夜に近い時刻ですが、ここ北極圏では白夜が近づき、夜は急速に短くなっていきます。かつて星々とオーロラが支配していた時間帯を、今は光そのものが押し広げているのです。オーロラ観測者にとっては少し寂しい季節の到来でもあります。これから夏に向かう数か月、空は完全な闇を失い、幻想的なオーロラの乱舞とはしばしのお別れになります。

しかし、それは決して終わりではありません。雪と氷の世界を越えた先には、澄みきった湖、芽吹く森、そしてほとんど沈まぬ太陽が照らす北欧の美しい初夏が待っています。冬の劇的な空から、光あふれる静かな季節へ。ポルユスの春は、別れと始まりが同時に訪れる、北極圏ならではの壮大な季節の転換点なのです。

(2026年5月上旬/スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅/東京から遠隔観測)

